平成23年度

認知症介護研究・研修大府センター
研究報告書

認知症に関する中学生および高校生の意識調査

介護職の職場定着に関する調査研究

社会福祉法人　仁至会
認知症介護研究・研修大府センター

平成23年度　認知症介護研究・研修大府センター研究報告書（認知症に関する中学生および高校生の意識調査／介護職の職場定着に関する調査研究）

目　次

平成 23 年度

認知症介護研究・研修大府センター研究報告書

1）認知症に関する中学生および高校生の意識調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

主任研究者　小長谷陽子（認知症介護研究・研修大府センター研究部）

分担研究者　鈴木　亮子（認知症介護研究・研修大府センター研究部）

2）介護職の職場定着に関する調査研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

主任研究者　横井　奈美（認知症介護研究・研修大府センター研修部）

分担研究者　中村　裕子（認知症介護研究・研修大府センター研修部）

本田　恵子（認知症介護研究・研修大府センター研修部）

研究協力者　汲田千賀子（認知症介護研究・研修大府センター研究部、日本福祉大学）

伊藤美智予（認知症介護研究・研修大府センター研修部、日本福祉大学健康社会研究センター）

認知症介護指導者大府ネットワーク

認知症に関する中学生および高校生の意識調査

認知症に関する中学生および高校生の意識調査

主任研究者　小長谷 陽子　（認知症介護研究・研修大府センター研究部）
分担研究者　鈴木　　亮子　（認知症介護研究・研修大府センター研究部）

A.　背景と目的

認知症に関する認識や知識はメディアで取り上げられる頻度が増えるにつれ、社会一般に広がりつつある。高校生、大学生などの若い世代にとっても「認知症」という言葉を聞く機会は増えている。その一方で、生活状況としては核家族化が進み、高齢者と生活する機会は減っている。そのため、「認知症」という言葉そのものは聞いたことがあっても、実体験を伴った正しい理解をする機会は決して多くない。また、若年性認知症に関しては、高校生、大学生の親が罹患する可能性がある年代であり、若年性認知症を含め認知症について知ることは若い世代にとっても必要なことである。今後、認知症患者の数は増加の一途をたどり、これからの社会の担い手となる若い世代に、認知症に関する正しい知識を早くから伝えることは重要なことである。

昨年度は、若い世代の中でも高校生を取り上げ、認知症に関する授業を実施し、それによる高校生の意識の変化について検討を行った。その結果、授業後のほうが認知症への理解が進み、問題意識も芽生えるなど、認知症の授業の実施が認知症に対する意識の変化につながることが示唆された。よって今年度は対象に中学生を加え、高校生に対しては、条件の異なる設定で行うなど対象を広げ更なる検討を行った。

B.　方　法

1.　対象者

年代の違いや実施時間の違いにより、以下の3群を対象者とし、調査1は<1>群、調査2を<2>・<3>群とした。

<1>群：公立中学 1 年生～3 年生：422 名（男子 219 名、女子 203 名）

	男子	女子	合計
中学 1 年生	77	70	147
中学 2 年生	71	70	141
中学 3 年生	71	63	134
合計	219	203	422

<2>群：国立大学附属高校 2 年生：男女 92 名（男子 42 名、女子 50 名）

<3>群：私立高校 2 年生女子：296 名

2.　授業の実施方法

総合授業として実施し、テキストとしては大府センターが高校生・大学生向けに作成した認知症啓発のためのパンフレット「認知症ってなんだろう」を使用した。各対象群の授業の所要時間は、<1>群および<2>群が30分、<3>群が60分であった。

3.　アンケート実施

授業前後でアンケート（添付資料①～③）を実施した。授業前後で意識の変化が見られるよう、共通の項目部分を設けるなどして作成した。どの群に対しても同じアンケート用紙を用いたが、授業前の問3・問7に、<1>群の中学生で実施したアンケートには「わからない」という選択肢を追加した（添付資料①）。これは、中学生の場合、高校生に比べ家族などに認知症がいたかどうかがわからない場合や、認知症に関する理解を問う設問も授業前ではわからない生徒が多いのではないか、という実施校の先生からの指摘を反映したものである。その他は、どの群に対しても共通の選択肢である。

以下に、授業前後のアンケートの項目を比較した表（表1）を示す。

表１　質問項目一覧表　（　　授業前後で同じ項目の部分）

質問項目一覧			
授業前		授業後	
問1	認知症について知っているか		
問2	若年性認知症について知っているか		
問3	家族など身近に認知症の人がいたかどうか		
問4	認知症の人が身近にいた場合，同居家族かどうか		
問5	認知症に対するイメージ（自由記述）		
		問1	認知症の授業はためになったか
		問2	「ためになった」と感じた理由（自由記述）
		問3	「ためにならなかった」と感じた理由（自由記述）
問6	認知症の基本的知識が高校生にも必要かどうか	問4	認知症の基本的知識が高校生にも必要かどうか
		問5	認知症に関して知っていたほうがいいと思うことや知りたいこと（自由記述）
問7①	認知症ともの忘れは同じである	問6①	認知症ともの忘れは同じである
問7②	認知症になった本人は，何もわからないから楽である	問6②	認知症になった本人は，何もわからないから楽である
問7③	認知症の方には，子どもと接するように接したほうがよい	問6③	認知症の方には，子どもと接するように接したほうがよい
問7④	認知症になると，いろいろな気持ちも感じなくなる	問6④	認知症になると，いろいろな気持ちも感じなくなる
問7⑤	自分の家族が認知症になったら周りの人に知られたくない	問6⑤	自分の家族が認知症になったら周りの人に知られたくない

4.　分析方法

授業前後で実施したアンケート項目について以下のように分析を行った。

調査1　※学年差に着目するため、性別については扱わない。

授業前のみの問 1～4 はクロス集計を行い、問 1～3 は χ^2 検定（Fisher's exact test）を行った。授業前後の共通項目である授業前 問 6 と授業後 4 については、「1. とてもそう思う」、「2. そう思う」、「3. そう思わない」、「4. 全く思わない」を 4 から 1 の数値に変換し、学年（中学 1 年・中学 2 年・中学 3 年）と授業実施（授業前・授業後）を独立変数とし、認知症の授業に対する必要性の評価を従属変数とした repeated measure の分散分析を行った。授業前後の共通項目である授業前問 7①～⑤と授業後問 6①～⑤についてはクロス集計を行った。授業後のみの問 1 は、「1.ためになった」、「2.まあまあためになった」、「3.あまりためにならなかった」、「4. ためにならなかった」を 4 から 1 の数値に変換し、学年（中学 1 年・中学 2 年・中学 3 年）を独立変数とし、認知症の授業に対する評価を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。自由記述部分については、代表的な回答を抜粋した。

調査2　※授業時間の差に着目するため、性別については扱わない。

基本的には調査 1 と同じだが、以下の 2 点のみ異なる。

授業前後の共通項目である授業前問 6 と授業後 4 については「1. とてもそう思う」「2. そう思う」「3. そう思わない」「4. 全く思わない」を 4 から 1 の数値に変換し、認知症の授業に対する必要性の評価について対応のある t 検定を両群それぞれに行った。授業後のみの問 1 は、「1.ためになった」「2.まあまあためになった」「3.あまりためにならなかった」「4. ためにならなかった」を 4 から 1 の数値に変換し、両群間での対応のない t 検定を行った。

5.　倫理的配慮

アンケート実施に関して倫理的配慮について説明し、同意をする場合のみ記入することとした。アンケートは無記名で行い、個人が特定されないよう配慮した。

C.　アンケート結果

結果は、授業前のアンケート項目の順に示していく。前後で同じ項目の部分については、その比較を示していき、その後に、授業後のみの質問項目について順に示していく。

調査1　：<1>群：公立中学１年生～3 年生（n=422）

※調査１では学年差に着目するため、性別については扱わない。

①授業前のみの項目

問１『認知症について知っていますか？』

	中学１年生		中学２年生		中学３年生		合計		p 値
知っている	46	(31.3)	59	(41.8)	71	(53.0)	176	(41.7)	<0.001
聞いたことはある	87	(59.2)	73	(51.8)	59	(44.0)	219	(51.9)	
知らない	14	(9.5)	9	(6.4)	4	(3.0)	27	(6.4)	
合計	147	(100.0)	141	(100.0)	134	(100.0)	422	(100.0)	

左:人数　右(　)内:%

認知症について「知らない」という回答は各学年で多くはなかったが、学年が下がるにつれてその割合は多くなり、中学１年生では約 10%であった.

問２『若年性認知症について知っていますか？』

	中学１年生		中学２年生		中学３年生		合計		p 値
知っている	5	(3.4)	9	(6.4)	12	(9.0)	26	(6.2)	<0.05
聞いたことはある	33	(22.4)	39	(27.6)	48	(35.8)	120	(28.4)	
知らない	109	(74.2)	93	(66.0)	74	(55.2)	276	(65.4)	
合計	147	(100.0)	141	(100.0)	134	(100.0)	422	(100.0)	

左:人数　右(　)内:%

認知症は高齢者の病気というイメージが強い。生徒が、“認知症は祖父母がなる病気”と思っていても、自分たちの両親が認知症になる可能性が全くないとは言えない。「若年性認知症」については、「知らない」と答えた生徒が、問１に比べると各学年共にかなり多くなった。また「知らない」という割合は、学年が下がるにつれて多くなり、中学 1 年生では約 74%であった。

問 3『ご家族、ご親戚などあなたの身近に認知症のかたはいますか？』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計		p値
以前は身近にいたが、現在はいない	3	(2.1)	2	(1.4)	10	(7.5)	15	(3.6)	<0.001
現在身近にいる	8	(5.4)	5	(3.5)	7	(5.2)	20	(4.7)	
身近にいない	69	(46.9)	84	(59.6)	85	(63.4)	238	(56.4)	
わからない	61	(41.5)	50	(35.5)	30	(22.4)	141	(33.4)	
未記入	6	(4.1)	0	(0.0)	2	(1.5)	8	(1.9)	
合計	147	(100.0)	141	(100.0)	134	(100.0)	422	(100.0)	

左:人数　右(　)内:%

以前や現在、身近に認知症の人がいた生徒の数は全体で約 8%と少なく、実際に接した経験のある生徒は少数であった。

問 4『 問 3 で「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」と答えた方がお答えください』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
同居家族	3	(27.3)	1	(14.3)	4	(23.5)	8	(22.9)
親戚	5	(45.4)	5	(71.4)	10	(58.8)	20	(57.1)
その他	2	(18.2)	1	(14.3)	1	(5.9)	4	(11.4)
未記入	1	(9.1)	0	(0.0)	2	(11.8)	3	(8.6)
合計	11	(100.0)	7	(100.0)	17	(100.0)	35	(100.0)

左:人数　右(　)内:%

認知症の方が「1.身近にいたが、現在はいない」「2.現在身近にいる」という生徒の中で、同居していた経験のある人は約 23%であった。対象となった 422 名の中で、認知症の方との同居経験がある生徒は約 2%とごくわずかであった。

問 5『あなたの認知症に対するイメージを書いてください（自由記述）』

以下は、自由記述の抜粋である。

●問 3 で「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
物忘れがはげしいのと、趣味に興味を示さなくなる。
やろうとしたことや思い出があるものを忘れてしまうこと。
言っても忘れる。したことを覚えていない。
同じ事を一分ごとに聞いてくる。身近にあるものを何でも触ってしまう。
物忘れが多い。いつもやっていたスポーツなどをやらなくなった。
すぐに忘れてしまう。前までの事も少し忘れてしまう。

きちんとした言葉が話せなくなる。物忘れが多く出る。
同じ言葉を何回も言う。昔のことばかり話す。
頭がぼやけてしまう。自分の行動がわからなくなってしまう。
自分の家族や自分に関する情報を簡単に忘れ、それを指摘されても思い出せない。
物忘れが多い。ボーっとしている。同じ事を何回も聞く。趣味がなくなる。
よくわからなくて、他の人から嫌われたりするのでかわいそう。もっと理解すべきだと思う。
以前気に入っていた物とかに全く関心を持たなくなったりすること。突然大声を上げたり、口数が少なくなったりすること。
脳の機能が低下して、ご飯を食べたことを忘れたり、ある人の名前を忘れたり、何かをどこに置いたかを忘れてしまう。
認知症になった人の一番大切なものとか見ると思い出してくれる。自分で何をやっているのかわからないから、物を自分の思うままにたくさん買ってきてしまうこともあるから、世話が大変。けっこうわがままになる。自分の生んだ子をお姉さんとか言う。

●問 3 で「3. 身近にいない」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
物忘れがはげしい。
頭が悪い。
感情がなくて、何をやるかも忘れる。
食事をしたのに食べてないと言う。
何もわからなくなる。
忘れてしまう。怖い。
よくないイメージ。
アホになって暴れて赤ちゃんになって死ぬ。
自分はなりたくない。大切な思い出を忘れてしまう。
老人がなりやすい。頭がおかしなことになる。治らない。
今日が何日かわからなくなるような記憶喪失のようなもの。
物忘れがはげしく、手助けをしてくれる人がいないと生活できない状態。
物忘れがはげしい。悲しい気持ちとか感情があまり感じられなくなる。なかなか治らない病気。
さっき言ったことをすぐ忘れて、同じ事を何回も聞く。精神的に不安定。
お世話がとても大変そう。
家族が大変な病気。
うつ病と似ているイメージ。
足がぐねぐねしている。目がいかれている。言葉が「あう」「いえ」ぐらいしかしゃべれない。
誰かもわからず、身内の人を忘れてしまい、みんなに迷惑をかけるようなイメージ。
家族の名前を忘れる。いつもよく探し物をしている。趣味や好きなことに興味がわかなくなる。
高齢者に多くて思考力などが低下している。場所、時間、やり方がわからなくなる。
治らない病。対処法次第で進行が遅らせれる病。
今どこを歩いているのかわからなくて、道に迷う。前できたことを忘れたりする。
アルツハイマーなどいろいろな種類がある。リハビリをすれば回復してくる。

世話をする人、認知症の方、どちらも苦労する。
思い出が思い出せなくなってかわいそう。
いろいろなことを忘れる。一人であまり行動できない。でも感情はあると思う。

身近に認知症の人がいた生徒とそうでない生徒ともに、「物忘れ」という記憶の障害のイメージが強い。

身近に認知症の人がいた生徒は、具体的な様子の記述が多いが、身近に認知症の人がいない生徒の中にはイメージとしての negative さの記述が見受けられた。その一方で「世話する人、認知症の方、どちらも苦労する」など、本人の辛さや周りの辛さに目が向いているものもあった。

②授業前後での共通項目

問 6(授業前)：問 4(授業後)

『認知症の基本的なことについて、中学生ぐらいの年齢の人たちも知っている必要があると思いますか？』

「1. とてもそう思う」「2. そう思う」「3. そう思わない」「4. 全く思わない」を 4 から 1 の数値に変換し、学年（中学 1 年・中学 2 年・中学 3 年）と授業実施（授業前・授業後）を独立変数とし、認知症の授業に対する必要性の評価を従属変数とした repeated measure の分散分析を行った。

分散分析の結果、交互作用は有意ではなく（$F(1,397)=0.286$, n.s.）、授業実施の主効果は 1%水準で有意（$F(1,397)=96.678$, $p<.001$）で、学年の主効果は有意ではなかった（$F(1,397)=0.388$, n.s.）。授業を実施することで、認知症の授業に対する必要性の評価が高まることが明らかとなった。

	中学1年生 (n=137)	中学2年生 (n=134)	中学3年生 (n=129)
授業前	2.80 (0.67)	2.80 (0.67)	2.68 (0.77)
授業後	3.12 (0.78)	3.11 (0.66)	3.05 (0.69)

上段:平均値、 下段(　)内:標準偏差

問 7①(授業前)：問 6①(授業後)『認知症は物忘れと同じである』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後
はい	23 (15.6)	11 (7.5)	19 (13.5)	9 (6.4)	16 (11.9)	15 (11.2)	58 (13.8)	35 (8.3)
いいえ	75 (51.0)	136 (92.5)	73 (51.8)	131 (92.9)	84 (62.7)	117 (87.3)	232 (55.0)	384 (91.0)
わからない※	48 (32.7)	— —	49 (34.8)	— —	34 (25.4)	— —	131 (31.0)	— —
未記入	1 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	2 (1.5)	1 (0.2)	3 (0.7)
合計	147 (100.0)	147 (100.0)	141 (100.0)	141 (100.0)	134 (100.0)	134 (100.0)	422 (100.0)	422 (100.0)

上段：人数、　下段(　　)内：%
※授業前のみ「わからない」の選択肢あり

授業前に「わからない」と答えていた生徒は、授業後は「いいえ」と答え、授業後の方が理解が進んでいた。

問 7②(授業前)：問 6②(授業後)『認知症になった本人は何もわからないから楽である』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後
はい	9 (6.1)	10 (6.8)	7 (5.0)	8 (5.7)	6 (4.5)	10 (7.5)	22 (5.2)	28 (6.6)
いいえ	89 (60.6)	137 (93.2)	87 (61.7)	133 (94.3)	85 (63.4)	121 (90.3)	261 (61.9)	391 (92.7)
わからない※	49 (33.3)	— —	46 (32.6)	— —	43 (32.1)	— —	138 (32.7)	— —
未記入	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.2)	1 (0.2)	3 (0.7)
合計	147 (100.0)	147 (100.0)	141 (100.0)	141 (100.0)	134 (100.0)	134 (100.0)	422 (100.0)	422 (100.0)

上段:人数、 下段(　)内:%
※授業前のみ「わからない」の選択肢あり

授業前に「わからない」と答えていた生徒のほとんどは、授業後は「いいえ」と答え、授業後の方が理解が進んでいた。

問 7③(授業前)：問 6③(授業後)
『認知症の方には子どもと接するように接したほうがよい』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後
はい	37 (25.2)	66 (44.9)	34 (24.1)	57 (40.4)	26 (19.4)	50 (37.3)	97 (23.0)	173 (41.0)
いいえ	20 (13.6)	80 (54.4)	23 (16.3)	83 (58.9)	24 (17.9)	79 (59.0)	67 (15.9)	242 (57.3)
わからない※	89 (60.5)	— —	83 (58.9)	— —	83 (62.0)	— —	255 (60.4)	— —
未記入	1 (0.7)	1 (0.7)	1 (0.7)	1 (0.7)	1 (0.7)	5 (3.7)	3 (0.7)	7 (1.7)
合計	147 (100.0)	147 (100.0)	141 (100.0)	141 (100.0)	134 (100.0)	134 (100.0)	422 (100.0)	422 (100.0)

上段：人数、 下段(　)内：%
※授業前のみ「わからない」の選択肢あり

授業前に「わからない」と答えた生徒の多くは、授業後に「いいえ」を選択してはいるものの、授業後に「はい」と答えた割合は全体では約 40%程度を占めていた。優しく接することは大切だが、それは「子どものように」ということではない。優しい気持ちを持ちながら尊厳を持った大人として接することが大切であるということをうまく伝えることができていないと思われた。

問 7④(授業前)：問 6④(授業後)『認知症になるといろいろな気持ちも感じなくなる』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後
はい	28 (19.0)	29 (19.7)	11 (7.8)	13 (9.2)	8 (6.0)	16 (11.9)	47 (11.1)	58 (13.7)
いいえ	43 (29.3)	118 (80.3)	54 (38.3)	128 (90.8)	47 (35.1)	115 (85.8)	144 (34.1)	361 (85.6)
わからない※	76 (51.7)	— —	75 (53.2)	— —	78 (58.2)	— —	229 (54.3)	— —
未記入	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	1 (0.7)	3 (2.3)	2 (0.5)	3 (0.7)
合計	147 (100.0)	147 (100.0)	141 (100.0)	141 (100.0)	134 (100.0)	134 (100.0)	422 (100.0)	422 (100.0)

上段：人数、 下段(　)内：%
※授業前のみ「わからない」の選択肢あり

授業前に「わからない」と答えていた生徒のほとんどは、授業後は「いいえ」と答え、授業後の方が理解が進んでいた。

問 7⑤(授業前) : 問 6⑤(授業後)『自分の家族が認知症になったら周りに知られたくない』

	中学 1 年生		中学 2 年生		中学 3 年生		合計	
	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後
はい	52 (35.4)	66 (44.9)	37 (26.3)	46 (32.6)	44 (32.8)	48 (35.8)	133 (31.5)	160 (37.9)
いいえ	29 (19.7)	79 (53.7)	36 (25.5)	95 (67.4)	30 (22.4)	82 (61.2)	95 (22.5)	256 (60.7)
わからない※	66 (44.9)	— —	68 (48.2)	— —	60 (44.8)	— —	194 (46.0)	— —
未記入	0 (0.0)	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (3.0)	0 (0.0)	6 (1.4)
合計	147 (100.0)	147 (100.0)	141 (100.0)	141 (100.0)	134 (100.0)	134 (100.0)	422 (100.0)	422 (100.0)

上段:人数、 下段(　)内:%
※授業前のみ「わからない」の選択肢あり

授業前に「わからない」と答えた生徒の多くは、授業後に「いいえ」を選択してはいるものの、「はい」と答えた割合は、授業後にどの学年も少しずつ増えている。授業を受けることが、認知症への抵抗感を和らげることにつながらなかった生徒がいるということであり、この点は、授業の内容や伝え方に何らかの工夫が必要と考えます。

③授業後のみの項目

問 1『 認知症の授業はためになりましたか？ 』

「1.ためになった」「2.まあまあためになった」「3.あまりためにならなかった」「4. ためにならなかった」を 4 から 1 の数値に変換し、学年（中学 1 年・中学 2 年・中学 3 年）を独立変数とし、認知症の授業に対する評価を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。

分散分析の結果は、有意ではなく（$F(2,416)=0.162$, n.s.)、学年間の評価の差はなかった。授業に対する評価そのものは、どの学年も平均値が 3 以上であり、ためになったととらえていた。

	中学1年生 (n=147)	中学2年生 (n=140)	中学3年生 (n=132)
授業評価	3.22 (0.84)	3.19 (0.83)	3.25 (0.81)

上段:平均値、 下段(　)内:標準偏差

問 2『 問 1 で「ためになった」「まあまあためになった」と感じた理由を書いて下さい』（自由記述）

●授業前の問 3 で「1.身近にいたが、現在はいない」「2.現在身近にいる」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
認知症の接し方がよくわかる。
身近にいる認知症の人への接し方がよくわかったから。
認知症について、自分が思っていたよりわかっていなかったから。
認知症はまあまあわかっていたけど、もっと詳しくわかったので。
あいまいだったけど、これを受けてわかったから。
このようにならないための予防法がわかったから。
家族への対応がわかったから。
今よりさらに怖さがわかったから。
認知症の治療法は音楽療法、回想法、運動療法、音読や計算、芸術療法。
ぼくの家には認知症のひいおばあちゃんがいるので、どう接したら効果的なのか勉強になった。
自分のひいおばあちゃんが認知症なので、どう接したらいいかわかった。
自分の知っていたことが基本となっていて、応用みたいなところがよくわかった。
自分のおじいちゃんが認知症でおばあちゃんやお母さんが大変な思いをしている事を知っていて、どうすればいいのかわからなかったけど、この授業を受けてよくわかった。

認知症の人が身近にいても、認知症に関して詳しいことを知る機会は多くはないようで、授業を受けることで新しい発見があったり気づきがあるようであった。

●授業前の問 3 で「3.身近にいない」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
認知症の事をあまり知らなかったけど、話を聞いてわかった。
今まではあまり意識していなかったので、今回を機に知れてよかった。
認知症と物忘れの違いを知らなかったので、教えてもらえてよかった。
認知症に対して誤解していたところもあったけど、今日で誤解がとけたから。
よく CM で認知症と物忘れは違うというのを見て、何が違うのかよくわかり、ためになった。
自分が認知症のことについて考えたり思っていた事とは、ぜんぜん違った。
認知症を少し勘違いしていたから、認知症の知らないことがたくさんわかったからです。
これからの将来に役に立つと思ったから。
もし身近に認知症の人がいたら、どう接すればいいのかわかった。
声かけとか必要なことを教えてもらったから。
イライラする原因や、完全に記憶がなくなるわけではないと知ったから。
認知症は周りの助けも必要。
認知症の大変さがすごくわかった。
認知症の人の気持ちや苦労。
認知症の人も看護をする人も苦労するとわかったから。

認知症の人の物忘れなどによる不安や苦しみが大きいということがわかったから。
昔にテレビで認知症について見たことがあったけど、介護者についてはやっていなかったので、知れてよかったと思った。
私の知る限りでは、近所や親戚に認知症の方はいませんが、認知症の方やそのご家族の方の気持ちを考える（知る）ことができたからです。
これからの人生でなるかもしれないから。
もしも私の周りの人がなったら、少しでも介護ができるので、今日の授業を受けなかったら認知症の人を助けられなかったので、ためになった。
これから自分に関係ある人が認知症になったら、この授業でわかったことをやりたいと思います。
自分のおじいちゃんおばあちゃんが認知症になったら、役に立つと思った。
もしお母さんがなってしまった時、今日勉強したことを参考にできると思ったから。
おばあちゃんやおじいちゃんがもしなってしまったら、絶対優しくしようと思った。
優しく接してあげることが大切だと思ったから。
おじいちゃんやおばあちゃんにもっと優しく接してあげようと思いました。
将来、街中でそういう人を見たら、手助けができるから。
身近な所にいても恥ずかしいと思わず、普通にいることとか、いろいろわかったから。

認知症のことが前よりもわかったというだけでなく、それまで認知症に対して抱いていた誤解がなくなったということも含め、様々なことを感じていた。

認知症のご本人が自分の病気をどのように感じ、日々どのような状態の中で過ごしているかについては、初めて聞く生徒が多かったようであった。現在、祖父母と同居している生徒は、より身近な問題として自分に引き寄せて感じていた。

自由記述の内容からは、正しいことを知ることの有用性がうかがえる結果となっていた。

問３『 問１で「あまりためにならなかった」「ためにならなかった」と感じた理由を書いて下さい』（自由記述）

自由記述内容
話が長すぎて頭に入らなかった。
つまらなかったから。
寝てしまった。
まだ先の話だから。
自分には関係ないから。
周囲にいないから。
あまり興味がわかない。
子どもに言われても困る。
難しくてよくわからない。絵で説明してください。
話があまりまとまっていなくて、ストレスの話の次はいきなり思考力の話、ページが飛んだり、ためにならなかったというより、うまくわからなかった。
だいたい思っていたことと同じだったから。
具体的に認知症の人との接し方を教えてくれなかったから。
自分の妹は自閉症でずっと面倒みないといけないので、歳を取ってなる認知症の方がまだいいと思う。

授業を実施する側が工夫する必要がある点の他に、まだ先のことと感じられ興味がないことや、既に知っている内容だったこと、生徒自身の事情などが理由としてあげられた。

問5『認知症に関して、皆さんが知っていたほうがいいと思うことや、もっと知りたいと思うことなどについて書いてください』（自由記述）

●「知っておいたほうがいいと思うこと」の抜粋

自由記述内容
認知症と物忘れと同じではなない。
認知症は病気だということ。
絶対に年寄りの方がなるとは限らない。
認知症になるとすべてを忘れてしまうということではない。
忘れることは多くなっても、感情は変わらないこと。
認知症のイメージ。悪いものではないということ。
誤解があるので、その誤解を解くようなことを知っていた方がいいと思います。
家族や身近な人が認知症になっても、恥ずかしがらないで言うようにしないといけないことを知った。
認知症は恥ずかしいものやうつるものではないものということ。
近所の人が認知症について知っていればよいと思った。
怒るのではなく、優しく接する。
優しく接すること。本人も周りの人もストレスを感じていること。
認知症の人でもしっかり普通の人として接する。
認知症の人はイライラしている時に優しく笑顔で接してあげるとうれしいと思うことを、知っておいた方がいいと思いました。
周りの人の手助けが大切だと思う。
物忘れとは違うけど、普段の生活が普通に過ごせないわけじゃない。
認知症だからといって、変に接しないで、バカにしたらいけない。
認知症の人と聞いて接しにくいと思わずに、困っている時は話しかけると安心するということは、知っている方がいいと思った。
認知症の人がどれだけ大変か。
本人が苦しんでいるということ。
認知症の人への対応の仕方や症状は知っておいた方がいい。
認知症は周囲の人の接し方によってよくなったりすること。
「何もわからなくなる」という認識が間違いということ。認知症による幻覚、幻聴は頭から否定してはいけないということ。
認知症になっても何もわからなくなるわけではないということ。自分達のかけた言葉で症状を悪化させてしまったり、病気の進行を早めてしまうかもしれないから。
認知症の方は不安だということ。だから何度も同じ事を聞いてしまうんだと思う。
誤解が本人を苦しめているということを知っておいた方がよい。自分の立場を考えて行動すること。
認知症は誰もがなる病気ではないけど、なる人はなってしまうし、それになってしまった時の早期発見の方法。
介護する人が心をもって接してあげれば、悪化しないということ。

介護者と認知症になった人の思いや気持ちは知っていると、大人になった時にそういう人に変な事を言わないようになると思う。
認知症の方と接する時の心構え、一緒に住む家族の苦労を知っておいたほうがいいと思う。

認知症は病気であることや、認知症の人への接し方を知っている必要があること、認知症の人やその家族も辛いことなど、授業を行う際の実施者側の伝えたいことを受け取ってくれていた。

●「もっと知りたいと思うこと」の抜粋

自由記述内容
なぜその症状が治りにくいのか。
認知症にならないようにするためのこと。
これからは認知症の原因について、もっと知りたいと思った。
家族がなった時に、どこに行ってどうすればいいかをもっと知りたいです。
もっと若年性認知症について知りたい。
自分がもし認知症になったら、自分自身が認知症になったことがわかるのかをもっと知りたいと思いました。
認知症の症状についてもっと詳しく。
認知症の人との接し方を、もっと知っていた方がいいと思う。
ダメな接し方。
認知症の人を見かけたらどうすればよいのか。
具体的な例が知りたい。
認知症の人はどんな日々を送っているのか。
ヘルパーについて。
デイサービスとはどんなものなのかを具体的に知りたい。
認知症になったらどのようなことをしたらいいのかを、もっと詳しく知りたいと思った。
認知症を遅らせる訓練が知りたいです。これからも調べて認知症のことをもっと知りたいです。
私は認知症の方の気持ちを知りたいです。
認知症になった人の体験談や中学生にやってほしいことを聞きたい。認知症になった人の体験談や中学生にやってほしいことを聞きたい。
認知症の方が経済的なことで苦しんでいるとしたら、どうすればよいのか。
他の病気なども知っていき、意味や接し方などを知っていきたいと思います。

認知症に関して少し知ることで、具体的な接し方、予防法、サービス、経済的支援のことなど、更に詳しく知りたいと感じているようであった。また、具体例や認知症の本人の“生の声”を聞きたいという記述もあった。

これらの意見は授業時間を長く実施する場合や、複数回数行う場合の参考になると思われる。